

作品：「モーガン・フリーマンの華麗なる脱獄」

■40 年以上前、クリント・イーストウッドの『アルカトラズからの脱出』（ドン・シーゲル監督）を見たが、それと比べると再現ドラマだけに迫力に欠けた。

とはいえ、脱獄の成功が脱獄囚たちの頭脳の勝利というより、刑務所側の不注意とおごりが要因だとわかった。

その後、脱獄囚はつかまらず、迷宮入り（？）になったが、湾内で溺死したであろうという示唆には、納得できるものがある。

■脱獄は、日本ではほとんど聞かないが、米国ではシリーズ物ができるほど起きていることに、まず驚かされる。

その第一話だけにアルカトラズ刑務所からの脱出劇は、計画立案、実際の準備作業ともリアリティーに富み、次々に立ちふさがる難関を突破する経緯はスリリングで迫真性がある。

脱獄成功の大きな要因は、囚人がこぞって協力したことだろう。

密告者、抜け駆けがいなかったことが印象的だった。

もう一点考えさせられたのは、情報の伝わり方。脱獄した 3 人は湾で死亡したと発表されたにも関わらず、あちこちで目撃談もあり、捜索は続いているとのことで、真偽は不明のまま。「人々は思い込みによる伝聞に振り回されており、話を聞いた人は自分で好きなように解釈し、脚色する」というコメンテーターの発言は、SNS 時代でも通じるアポリアである。

■脱獄した彼らがサンフランシスコ湾へと漕ぎ出した 1 か月前、東ドイツでは、壁の下をくりぬいたトンネルから、12 人の東ベルリン市民が西側への脱出に成功したと年表にあります。

人は自由を得るためには、アートとテクノロジーを駆使し、身体を鍛え、まわりの共感を集めていく。本物の髪の毛を貼り付けた偽の頭を造形する。コンクリートを熱して壊す。ゴム糊で水漏れを防ぐ。冷たい海水に耐えられるように鍛錬を重ねる。そうした彼らの努力を同じ境遇の人々が助ける。

いやあ、面白いものです。善行を積んで、メンバーが、連絡の取りやすい隣り合った独房に入れるようにするという最初のステップから、ビジネス書の成功談を読んでいるような爽快感があります。企みを描くことは、良いことでも悪いことでも、エンターテインメントの王道なのかも知れません。

■歴史的脱獄事件を丹念にトレースしながら、脱出困難とされたアルカトラズの構造、機能、役割、そして歴史的価値を分かりやすく明らかにするという番組のねらいは見事に果たされていた。

しかし、どうしてもハリウッド映画「アルカトラズからの脱出」と比べてしまう。あの緊迫感に比べると、解説的でストーリー性に欠けるのが唯一最大の欠点と言えよう。それでもアングリン兄弟の甥という貴重な証言者などによる多角的な解析により脱獄の全貌が明らかにされ、知的好奇心は十分に満たされた。

■司会兼総指揮者の圧倒的存在感、声と語りに説得力がある。

日本語もよくこなれていて印象的フレーズがいくつもあった。

囚人全体の希望と看守の自信の対比、脱獄者の想像を絶する忍耐強さと勉強家など確かに名作映画を思わせる迫力とロマン。

新技術活用の企画とのことだが、このようなスーパーエピソードが8本も作れるとは驚きである。

■映像技術が駆使され、アルカトラズの構造がよくわかった。周到な計画を知るにつれて、他の囚人達と一緒に脱獄を応援したくなってきた。

女性歴史家のコメントが、「……わ」「……よ」と女性言葉で訳されていたが、昨今はユニセックスな言葉で訳される傾向が強くなりつつあるのではないか。日本人でもあの年頃の女性は女性言葉を使用しないため、やや違和感を覚えた。

脱獄が少ないとされる日本からすると、なぜアメリカ人は命を賭して脱獄にトライするか、が気になる。

■脱獄不可能で有名なアラカトラズ刑務所。

これまでもその脱獄物語が様々な作品に紹介されてきた。

そんな中で実際に脱獄を果たした4人をピックアップし、その手口を巧みに詳細にドキュメンタリー的に紹介した作品で引き込まれる。

しかもそのメインナレーターはモーガン・フリーマン。

更にこの作品のドキュメンタリー性を盛り立てている。

【総括】

映画「アルカトラズからの脱出」と比較した委員は、映像的「迫力」の点でやや低い評価を与えていた。だが、アルカトラズの歴史的意味を描いたところ、脱獄者たちの努力と技量、説明役のモーガン・フリーマンの力量については、高い評価である。

脱獄に成功した後の成り行き情報が錯綜していることを情報社会の様相として関心を持った委員もいた。善悪を問わず、企みを描くことは、エンターテインメントの王道だという意見もあった。

全体として、知的好奇心を満足させる作品だと言える。

女性によるコメントを訳したときに、昔風の日本語(「よ」「わ」を末尾につける)を安易に用いることは注意すべきとの発言もあった。

作品：「黄金のジパング～佐渡金山 400 年の歴史」

■短時間に、金山の歴史を要領よくまとめている。画像的にもよくできていたと思う。

西部開拓時代の、カリフォルニアのゴールドラッシュ、あるいはサウス・ダコタのグラック・ヒルの金山より、200 年以上前に日本でゴールドラッシュがあった、というのは興味深いものがある。

これはよい企画だったと思う。

■世界遺産登録で関心を集めている佐渡金山だが、その「栄光と悲劇」は、日本人の間でも、あまり知られていないのではないかと。江戸時代に本格化した金の採鉱は、一時 5 万人が佐渡に集まる隆盛ぶり。

しかし中期以降はタガネと槌で地下坑道を掘り進み、排水作業をしながらの重労働で、病死や逃亡死する鉱員が続出するなどの悲劇も招いた。明治期からは火薬や掘削機を使う近代的採掘法が取り入れられ、1940 年に歴代最高の生産量を記録。最後の積み出しは 1989 年のことだった。

本作品は、こうした佐渡金山の 400 年の歴史を絵巻物等の資料を駆使、採鉱跡を紹介するなどしてコンパクトにまとめており、意義深いものになった。産業遺産として、何がとりわけ世界的に価値があるのかをクローズアップした編集が欲しかったところだが、興味深く見ることができた。

■鉱山の労働は世の東西を問わず、昔から厳しいと聞きます。

当作品で、江戸時代においても、江戸の無宿人が強制労働をさせられていたことを知りました。彼らの最後を看取ったのが、日蓮宗の寺。かつて佐渡島に流された日蓮との因縁を思います。

後半、「世界中から学生と学者が、技術を学びに佐渡に来た」とありますが、労働者については触れていません。朝鮮半島からの労働者は、1939 年には「募集」という形でしたが、1944 年からは「徴用」だったと明らかになっています(広瀬貞三「佐渡金山と朝鮮人労働者(1939-1945)」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』2000 年)。

1942 年時点では、労働者のうち日本人 709 人、朝鮮人 584 人。過酷な坑内作業は、主として朝鮮半島の人担当。地元で「よろけ」と言われた珪肺症で、坑内で働く人の寿命は長くはなかったようです。

きらめく金銀の裏側には、闇があることを描ければ、文明のありようを考える秀作となり得たのに残念です。

■知っているようで良く知らない佐渡金山の歴史をコンパクトに解き明かしてくれたことを評価する。

世界遺産登録が議論される中で、佐渡金山の歴史的かつ文化的な価値がどこにあるかのかが大きな関心の的となっている。

江戸時代の採掘方法の歴史的価値や金山を中心とした佐渡独特の文化について、明確な視点による踏み込んだ分析があれば、更に評価すべき番組となっていたと思うと少々残念である。

■世界的な社会経済状況や技術の流れにも触れながら栄枯盛衰がコンパクトにまとまっていた。
作業の困難さ、人の流れ、技術革新にも丁寧と言及。

- ① 「佐渡」の地理的気候風土的社会的位置づけの説明
- ② 現代とのつながりが史跡観光資源中心
- ③ 過酷な労働過程で自然発生的に生まれた面もあった民謡の歌詞や存在価値
にもう一工夫加われば、短時間番組ながらさらなる見ごたえが得られたであろう。

■佐渡金山の歴史が、過不足なく紹介されており、日本人にも外国人にも楽しめる構成ではないか。
歴史的に見ると日本のアルカトラズ的な存在でもあった佐渡が、「黄金の国」のイメージ源でもある事実が興味深い。世界遺産登録騒動についても取材してほしかった。

■世界遺産登録候補、韓国の横槍問題等で注目されている今、タイムリーな話題ではあるが、目的不明確な作品で疑問。更に登場人物の紹介も謎。
ただ歴史を伝えるだけでなく、最後の従業員、小池勝さんをクローズアップして描いたほうが・・・。
どちらにしても素材不足も明らか！

【総括】

肯定的意見としては、「アメリカのゴールドラッシュより 200 年以上前に日本にもゴールドラッシュがあったということは興味深い」「400 年間の歴史をコンパクトにまとめていて意義深い」「知っているようでよく知らない歴史を解き明かしている」「鉱山作業の困難さ、人の流れ、技術革新について丁寧に言及している」「歴史が過不足なく紹介されている」といったものであった。

一方、「産業遺産としてどの点が世界的に価値を持つのかに焦点を当てた編集が欲しかった」「どのような労働者が働いていたのかについて、明治以降の状況については踏み込んでも良かったのではないか」「佐渡の独自の文化との関係性についてもう少し触れて欲しい」などの見解が述べられていた。

その他ご意見、課題など

■歴史という切り口は、多様なコンテンツを生み出せます。「記録」をきちっと押さえた上で、未体験の人にも、ありありとした「記憶」を再現できれば素晴らしい。

微妙な問題も扱う場合もあるでしょうが、事実をベースに思わぬ視点から切り込めば、どこからも批判されない(しにくい)エンターテインメントを作れるはず。

創意工夫です!

■佐渡金山のような社会的関心の高いテーマについて、ヒストリージャパンのオリジナル番組が製作されることは大歓迎である。

ただせっかくオリジナル番組として製作するのであれば、ヒストリーならではのオリジナルな視点が明確に示されることが重要ではないか。

覚える歴史から考える歴史への転換のために更なる努力をお願いしたい。

■あらためて提示された編成方針、キャッチフレーズともに、明快でわかりやすい。

日本の近現代史に焦点を当てるというのは大切なことだ。

公表機会の少なかった映像資料等を避けることなく活用して、あえて言えば、近現代史はまだ日が浅いので、「正しい」理解よりは、多角的視点の提供を期待したい。

また、政治や外交だけでなく、庶民の生活文化史や地域社会等、幅広く扱っていただければと思う。

蛇足ながら、3つの柱の「日本史」のイメージ画が従来のなのはちょっと気になった。

■一日も早く対面で審議できる日が来ますように!

コロナの収束を祈っています。